

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

ふつう私たちが「戦争」という言葉で思い浮かべるのは、基本的には国家間の戦争です。お国のために戦争に行く、とか、国の政策に反対して平和を訴えるとか、いろいろありますが、戦争にははっきりした「敵国」があつて、その「敵」に対して自分の国が軍事行動をとる、ということですから戦争はしたくない」とかいろいろな考え方ができます。日本の過去の戦争の話で、爆弾三勇士だとか、真珠湾攻撃だとか、特攻隊だとか、戦艦大和が沈んだとかいうのも、すべて国家間戦争が枠組みになっています。

しかし、考えてみると戦争が今のような国家間戦争になったのは、そんなに昔のことではありません。村とか国というのはあつたけれども、今のように世界が国家に区分されるという状態が原理的に成立したのは十七世紀半ばのヨーロッパのことです。その頃西洋で近代国家の形ができたのですが、その近代国家というものには要件があつて、簡単に言うると第一に、明確な領土があること、第二に、人びとがそこに恒常的に属していること、つまり国民がいること、そして第三に、中心権力つまり主権があつて一元的に統治されていることです。それを主権国家と言いますが、世界が——当時はヨーロッパが、ということですが——そういう国家の集まりとして考えられるようになってからの話です。ここで少しだけ用語について補足しておけば、「ヨーロッパ」というのは、基本的には②です。それに対して「西洋」というのは「オクシデント」というラテン語の訳で、これはローマ帝国を東西に分けたときの「西方・西側」にあたり、歴史的には単に地名というより③的意味合いのこもった使い方をします。とりあえずこの違いを念頭においてください。

話を戻せば、ふつう、われわれが想定するのは、そういう主権国家同士の戦争です。ただ、戦争という言葉をもっと広げて考えていくと、昔の部族間の争いとか、さまざまな集団間の武力抗争とか、そういったものも一般的には戦争と言えるでしょう。

ところで、犬の群れ同士は戦争をするのか？「一〇一匹わんちゃん」のよう

に擬人化された犬は戦争するかもしれない。けれども、ふつうは犬が戦争するとは言わないでしょう。猿の群れが戦争しているとも言わない。それはなぜでしょう？

「戦争」という言葉にはもうひとつ欠かせない要件があります。それは武器を使って組織的に戦うということです。武器は文明の一部だから、人間の集団がやるのが戦争なのです。

では、なぜ集団間の抗争は起こるのか。人間が狩猟採集生活をしていた頃は、あの辺りに木の实がたくさんありそうだとそこへ行ってみたら、もうすでに他の集団がいた。俺たちは何十キロも歩いてきたのにあいつらが先に！ということとで争いになったとしても、それは単なる奪い合いであつて、まだ戦争という言葉には馴染まないでしょう。餌場の取り合いというのは喧嘩とは言いかもしれないけれども、戦争ではない。

それが、狩猟採集生活の段階を抜けて、農耕するようになって、農耕するようになるでしょう。この場合は野菜ではなく、穀物栽培です。基本的には保存できる食糧ですね。農耕のためには集団が定住しなければなりません。定住して、穀物を栽培して収穫する。それは保存食糧になります。するとこれが人間にとっての最初の富となり蓄積財産となるでしょう。集団が富を持つようになる。この富は、お金ではなくて、命をつなぐことができる決定的な財産です。そうするとその財産の管理とか富の分配をめぐる、定住する集団内部で力関係や秩序ができる。そうやってその集団には定着した組織ができてきます。そこに、外敵が富を奪いにやってくる。もちろん集団で武装して、すると互いに皆が武器をとって戦い合うようになります。それがたぶん戦争の祖型だと言つてよいでしょう。そういう争いは残念ながら避けがたい。

そして武器が発達していつて、集落の守り方も戦い方もそれに従つて進歩してゆきます。戦車とか飛び道具ができたりします。そうすると、しだいに戦いに優れた大きな勢力が生まれ、そういう勢力が周りを平定していきます。例えばアッシリアとかエジプトとか。もちろん中国でもそうでした。戦争というのはそういうふうにして大きくなってゆきました。

ところで、原理的に言って、単独の人間というのは存在しません。人間は集団生活をしています。どういうことかと言うと、人間は言葉を使うでしょう？言葉というのは、周りにそれを使っている人間が大勢いなかったら身につきません。言葉はつねに一人ひとりの人間より先にあったわけです。その言葉と共同性というのは切っても切れない関係があつて、その関係の中でわれわれは一人ひとり人間になつてゆく。だから人間というのは基本的に集合的存在であつて、単独の人間というのは想定できません。

だから必ず集団があるわけですが、昔の集団の場合は、洋の東西を問わず、個人の独立といった意識は今ほど重要ではなかったでしょう。とはいつてももちろん、体や心は別々で、生きているのは一人ひとりであつて、顔も違えば名前も違う。それぞれ考えることも違う、区別された個人です。そんなふうに個であるけれども、一人ひとりが当たり前に個でありうるのは平時、普通の、平穏な時です。

けれども、ひとたび他の部族と戦^{いくさ}たとなると、個は集団の要素になる。何のために戦うかという、自分の属する集団を守るためだからです。その時には、あらゆる個の行動は集団のためのものとして統合される。そうでなければ戦いになりません。平穏な時は一人ひとりの個であるけれども、そうでない時、つまりそれを「非常時」というわけですが、その時にはジリ^{ジリ}ヨク^{ヨク}がかかったように人びとはイッセイに集団に統合されます。

皆が集団として戦います。けれども、その中で人並み外れて優れた働きをすると、そういう者が英雄になる。功労者になる。その英雄が倒れると、集団のために身を犠牲にした、そして自分たちを救ってくれたというので祀^{まつ}られる。それが神と崇^{あが}められたり、その子が権力者になったりする。そんなふうにして、非常時である戦の時の功績というのは、共同体の中でたいへん重要な意義を与えられます。

それがときに部族の創設神話の主人公にもなる。われわれの三代前の河向うの大きな部族との戦があつて、その時われわれの部族はまだ小さかったけれど

しみに表現を与え、死者たちを記憶し、表現することで生き延びてもゆくのですね。悲しみの感情さえ生きる糧^{かて}になる。

⑦ また、戦を見聞^{けんもん}した人が出来事を叙事詩に替えたりする。そういうところが文学の起源があります。

(西谷 修「戦争とは何だろうか」)

問一 傍線部イホについて。カタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで記しなさい。

問二 傍線部①について。筆者が言う「国家」とは何ですか。それを端的に表している語を文中から抜き出しなさい。

問三 空欄②に当てはまる語を文中から抜き出しなさい。

も、あの英雄のお蔭^{かげ}で勝ち、大きく発展して今の繁栄がある、とか。英雄がこの国の基礎を造ったといった、集団ごとの物語があります。そうしてその物語をみんなで共有する。それが仲間意識や部族のホコリ^二を作り、その英雄に続けと言つて、次の戦の時にはそれを模範にみんなが戦うことになる。そして、一人ひとりの死は集団の存続のための「犠牲」だとして意味づけられ、そういうかたちで集団が固められてゆきます。

そこで、まずひとつ言えるのは、平時があつて非常時がある。その「非常時」の特徴は何かというと、個に対して、集団が圧倒的に優位に立つ、ということです。いわば集団が個に勝利するというのが非常時です。一人ひとりの生には意味はない。一人ひとは死んでも、集団が生き延びればよい、ということ。そういう関係は平時にはセンザイ化^ホしますが、平時にも集団を組織する仕組みとして浸透してはいるでしょう。

非常時には、個を呑み込んで集団全体がいわば励起^{れき}されるわけです。それが個にも個を超えた力を発揮させる。一人が倒れると、よし、お前の分までと、普段は頼りなくても、このときはばかりは奮起して敵を何人も倒したりと、異様な力を発揮する人がいる。それをあれは人間ではない、人を超えた鬼神だ、血まみれになつて怖い、というので畏^{おそ}れられながらも讃嘆される。怖いものを崇める、その御利益^{ごりやく}にあやかるとか、そういう関係もありますね。それは崇拜というもののひとつの起源でしょう。

勝った方はそうとして、では敗れた方はどうなるか。場所や状況にもよるでしょうが、敗れると、男は奴隷となり、女は戦利品となつて、その分、勝った共同体が豊かになる。そうして勝った側だけの物語が残ることになります。

ただ、もうひとつ生まれるものがある。それはエレジー(哀歌)ですね。こんなふうに国の人びとは雄々しく戦つたけれども、その甲斐もなく、故郷は敵に蹂躪^{ろうりく}され、父兄弟はみな倒れ、あるいは捕囚となり、喪失や滅亡を嘆き悲しむ女たちの哀歌というの残ります。また、そんな哀歌をすることで生き延びることが出来ます。悲しみが内に籠^{こも}つてしまうと気が狂つたり、水に飛び込んだりしてしまうけれども、こういう極限状況では、哀歌を歌うことで人は悲

問四 空欄③に当てはまる語を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 経済 イ 文明 ウ 宗教 エ 伝統 オ 風土

問五 傍線部④「犬が戦争するとは言わない」とありますが、その理由を解答欄の形式に合うように二十字以内で答えなさい。

問六 傍線部⑤「戦争の祖型」がでかがる状況の具体例として、適当でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 農作業によつて得られた収穫物を、今年から支配者に三割も納めなければならなくなった。
イ 遠くまで歩いてようやく見つけた豊かに実った木の実をめぐつて、他の集団と奪い合った。
ウ 味がいいと評判の私たちの村の農作物を、他の村の者たちが奪う計画をしているとの情報が入った。
エ 獲物が山で捕れなくなってきたので、仲間を集めて一緒に農耕を行うようになつて生活が安定した。
オ 収穫を終えた農作物を奪われてはたまらないので、村の人々が武器を手にとつて集まった。

問七 傍線部⑥「原理的に言って、単独の人間というのは存在しません」とは
どういうことですか。適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 人間は、常に誰かと会話をして安心したいといった依存的な体質があるということ。
- イ 人間は、世界中どこでも昔から個人の独立といった意識を持っていなかったということ。
- ウ 人間は、共同体の中で言葉を使いながら関係性を築いていく存在であるということ。
- エ 人間は、集団の要素となつて個人の欲求を抑えて生きていく存在であるということ。

問八 傍線部⑦「文学の起源」について。文中に述べられていないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 戦を見聞した人がそのときのありさまを詩にする。
- イ 遠い昔の英雄が戦をして国を造つたという神話が生まれる。
- ウ 戦に敗れたことから生じた悲哀を、残された者が歌にする。
- エ 勝者の残忍さを描き出し、戦の悲惨さを訴える詩ができる。

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

太二(ぼく)の所属するテニス部には、コート整備をグリーパーじゃんけんの結果で人数の少ない方の部員が行う伝統がある。ある日、太二は、他の部員からパーを出すよう持ちかけられ、その通りにパーを出す。すると、末永という部員だけがグリーパーを出し、末永ひとりがコート整備を行うことになった。太二は他の部員の言いなりになったことを後悔しながら帰宅する。ちょうどその日は、看護師の母は夜勤で、受験をひかえた姉の帰日も遅く、父が家事をする日であった。

姉とちがい、ぼくは地元の第一中学校に進むつもりでいた。公立中学校にはめずらしく硬式テニス部があり、しかも毎年県大会に出場している強豪校だ。部員が多いと練習に支障をきたすため、入学後のセレクションで一学年二十四人にしぼりこむというが、ぼくは選ばれる自信があった。

父の転職について、ぼくに説明があつたのは一月末だった。四月から、父は商店街の豆腐店で働くという。

「家のなかがバタバタするとおもうけど、しっかり頼むぞ。テニスも勉強もがんばれよ」(A)

「うん、わかった」

そう答えながら、ぼくは父をすごいとおもつた。四十歳をすぎてから、肉体的にもきつい仕事につくひとなんてめつたにいない。

父によると、九月の連休中に、たまに買い物に行っていた商店街の豆腐店に立ちよつた。なじみらしい客と店の主人が話をしている、後継ぎもいないので一年後には店をたたむつもりでいると聞き、父はその場で決意して弟子入りを志願した。

豆腐店の主人は面食らい、その年齢ではとても無理だと断つた。しかし父はあきらめず、仕事の合間を見つけては、弟子入りをお願いしに行つた。大学生のときに近所の豆腐店でアルバイトをしていたので豆腐のつくり方は一応心得ている。油揚げや厚揚げだって揚げられる。高校、大学とラグビーをしていた

ので、いまでも体力には多少の自信がある。あまりの熱心さに店の主人もついに折れて、実はお客さんからも店を開めないでほしいと言われていたのだとうちあけて、父の願いを聞きいれてくれたとのことだった。

「まあ見ていてくれ。おとうさんは、この歳になつてようやく、一生つづけたいとおもえる仕事が見つかつて、うれしくてしかたがないんだ」(B)

父は豆腐づくりに全力でとりくみだした。腕にやけどをしてくるのはしょっちゅうだし、なれない水仕事で手にあかぎれをつくりながらも、楽しくてしかたがないようだった。

サラリーマンのときは、仕事のことなんてほとんど話してくれなかったのに、父は晩ごはんのとき、豆腐づくりについてあれこれかたつた。材料は国産大豆と天然のにがりだけで、消泡剤は使わない。そのため大豆を煮るときに泡が立ちやすく、ふきこぼれないように火加減をチョウセツするのがとても難しい。しかも、にがりをうつタイミングで豆腐のできはまるでかわってしまう。気温やシツドのちがいの考えにいれなければならず、一年三百六十五日、同じ味の豆腐をつくりつづけるのは本当にたいへんだ。日本では大豆を生産する農家が減る一方だし、良質の豆を手に入れるためには農業のありかたについても考えていかなければならない等々、豆腐に関する父の話はつきることがなかった。

「太二、どうした？ 早く来いよ」

父に呼ばれて階段をおりていくと、テーブルに晩ごはんが並んでいた。まんなかに麻婆豆腐をよそつた大皿があり、となりの中皿には中華サラダと、おかわりをのせたトマトの 슬라이ス。味噌汁はシジミで、きざんだ万能ネギがふつてあつた。

「よし、食うぞ。腹がへって、もうガマンができん。いただきます」(C)

ぼくがテーブルにつくなり父はレンジで麻婆豆腐をすくい、モウレットな勢いで食べた。丸一日働いたあとなので、とにかくおなかがすくらしい。もともと筋肉質だったからだだがさらにたくましくなっていて、なかなか筋肉がつかないぼくは父がうらやましかつた。もつとも、父も子どものころはクラスで一

番小さいくらいで、背がノびたのは高校生になってからだという。

「どうした、食わないのか？ うまいぞ、奮発して黒豚の挽肉ひきにくを使ったからな。しかも豆腐は、おとうさんがつくった特選木綿豆腐だ」《D》

修業を始めて一年半がすぎ、父はかなりの手ごたえを感じているようだった。このところ父の豆腐は一段とおいしくなっていたし、料理の腕まであがって、今夜の麻婆豆腐はこれまでで最高のおいしさだった。

「うん、うまい」と答えたおとうさん。ぼくは悲しくなって顔をふせた。

「おい、どうした？」ときかれても返事ができず、ぼくはトレーナーそでの袖で涙をふいた。

「部活かクラスで、うまくいかないこともあるのか？」

「あるけど、だいじょうぶ。自分たちでどうにかするから」

「そうか」

「うん。言っとくけど、おれがいじめられているわけじゃないからね」

かえって心配させてしまう言い方だったと気づいて顔をあげると、父はそれ以上はなにもきかずに、黙ってごはんをかきこんだ。

「よし、ごちそうさま。悪いが、おとうさんは風呂にはいつて、そのまま休むぞ。一時間もすれば弓子が帰ってくるだろう。あいつも勉強で疲れているはずだから、おまえが麻婆豆腐や味噌汁を温めなおしてやつてくれ。あと、あしたの朝はパンだからな」《E》

午前二時半におきる父は、午後九時には寝てしまう。以前は夜中に酔って帰ってくることもあったのに、このところは健康そのものの生活で、そうでなければおいしい豆腐はつくれないとのことだった。

高校二年生になった姉は、授業がおわったあとに、学校の近くにある図書館で勉強してから帰ってくる。帰宅は九時すぎで、いつも父とはすれちがいであった。塾に行けないぶんを自力でおきなおうとしているのだろうが、ぼくには姉が父をさげているようにも見えた。もつとも、母とはよく話をしているらしい。

「ねえ、おとうさん」と、風呂場にむかおうとする父にぼくは声をかけた。

「なんだ、どうした」

問一 傍線部イ・ニのカタカナを漢字に直しなさい。

問二 波線部 a 「面食らい」・ b 「心得ている」の意味として適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- | | |
|-------------|--------------------------------|
| a 「面食らい」 | |
| ア しばらくたじろいで | イ 一喝 <small>いっかく</small> を浴びせて |
| ウ 軽くあしらって | エ 突然のことに驚いて |
| b 「心得ている」 | |
| ア 記憶している | イ わきまえている |
| ウ こだわりがある | エ 引き受けられる |

問三 傍線部①「肉体的にもきつい仕事」とありますが、「肉体的」なきつさが最もよく表れている一続きの二文を探し、最初と最後の五字を抜き出しなさい。ただし、句読点も字数に数えるものとします。

「このところ、腰はいいの？」

「良くもないが、悪くもない。いまギックリ腰をやるわけにはいかないからな。準備体操は念入りにしているし、適度に動かしているほうがからだにはいいみたいだ。なんだ、おまえ、腰が痛いのか？」

「いや、そうじゃなくて」とぼくがためらっていると、父は息をついてイスにすわった。

「そうだな。豆腐屋になると決めてから、おとうさんは自分の仕事のことばかり考えていたからな」《F》

独りごとのようにつぶやき、父はテーブルに両手をのせた。豆腐づくりを始めてから、父の手はふだんでも白くむくんでいた。冷たい水に手をつけることが多いので、タオルでふいてもどうにもならないのだという。

「頼みごとがあるなら、遠慮しないでいいぞ。なんだ、新しいラケットかシューズでも欲しいのか？」

「いや、そうじゃなくて、いつかまた家族四人でテニスをしたいとおもってさ」

ぼくが言うと、父はいったん視線をはずしてから小さくうなずいた。ほんの一年間だけだったが、ぼくが小学一年生のときは毎週土曜日に家族四人でテニスクールに通っていた。練習のあいまに親チームと子どもチームでダブルスの試合をしたり、つぎのときは男チームと女チームで戦ったりと、本当に楽しかった。

「おとうさんたちのラケットも、とつてあるんでしょ？」

「ああ、ちゃんと押入れにしまつてある。おまえが小学生のときに使っていたラケットも一緒に、四本まとめてとつてある。でも、使うまえにガットをはりかえないとな」

「それならよかった。呼びとめてごめん、明日も早いでしょ」

「ああ、さつさと風呂にはいらないな」

そう答えながらも、なかなかイスを立とうとしない父のまえで、ぼくは麻婆豆腐をたらふく食べた。

(佐川光晴「四本のラケット」)

問四 傍線部②「ついに折れて」とは、具体的にはどういうことですか。解答欄の形式に合うように十字以内で答えなさい。

問五 傍線部③「ぼくは悲しくなって顔をふせた」とありますが、その理由として適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- | |
|---|
| ア 仕事を变えた父が実は家族の中で浮いているのに気づいて、悩んでいる自分と同じようにみじめに思えてきたから。 |
| イ 仕事を变えた父の体格がたくましくなるのに、部活動をがんばっても筋肉がつかない自分が情けなく思えてきたから。 |
| ウ 仕事も変えていろいろとうまくいっていきそうなのに比べて、部活動のことで悩んでいる自分がみじめに思えてきたから。 |
| エ 仕事を变えた父がテニスをする余裕を失ったことで、いやいやながら部活動を続けている自分が情けなく思えてきたから。 |

問六 傍線部④「父はそれ以上はなにもきかずに、黙ってごはんをかきこんだ」とありますが、この時の父の気持ちとして適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 全てを話してくれない太二を心配に思いながらも、息子を信頼し見守ろうとする気持ち。
- イ 自分に対する太二の態度の変化にとまどい、それを悟られないよう平静を保とうとする気持ち。
- ウ 太二の悩みが何なのかかわからず、いらいらしながらやけを起こしてしまいそうな気持ち。
- エ 太二の深刻な様子にうろたえ、うまく助言できない自分をもどかしく思う気持ち。

問八 傍線部⑥「なかなかイスを立とうとしない父」とありますが、この時の父の思いとして適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 麻婆豆腐がうまくできているのか気がかりであるから、太二の率直な感想を聞いてみたい。
- イ 太二が母や姉よりも頼もしく思えてきたので、自分に代わって太二が家族をまとめてほしい。
- ウ 学校での悩みを家族の話題にすりかえるのをやめさせ、太二の口から本当のことを聞き出したい。
- エ 以前の家族四人を懐かしく思い出したけれど、今は自分の仕事のことばかり考えていて太二に申し訳ない。

問七 傍線部⑤について、「ぼく」はどのようなことを「ためらっている」のですか。文中の表現を用いて、三十字以内で説明しなさい。

問九 次の一文は、文中の〈A〉〈F〉のどこに入れるのが適当ですか、記号で答えなさい。

そのことばを聞いて、ぼくは父が会社での仕事をあまり好きではなかったのだとわかった。

受験番号
氏 名

得 点

小 計

—

問一	イ	口		ハ	ニ	り ホ
問二						
問三						
問四						
問五	犬は					
問六						
問七						
問八						

から。

小 計

二

問一	イ		口		ハ	ニ	びた
問二	a		b				
問三	最初				最後		
問四	店の主人が						ん。
問五							
問六							
問七							
問八							
問九							